ときの玉手箱

～彦根城博物館からのメッセージ～

第363回

玉子手茶碗 ～井伊家伝来・高麗茶碗の美～

さまざまある茶の湯の道具の中でも、茶碗は、手に取り口に触れる道具であり、最も身近に用いるものです。そのため、その姿はもちろん、細部の質感に至るまで、とりわけ吟味されて用いられてきました。

茶碗は、制作地によって大きく三種に分類されます。中国で制作された「唐物茶碗」、朝鮮半島で制作された「高麗茶碗」、日本国内で制作された「和物茶碗」です。

玉子手茶碗　当館蔵

日本において、茶の湯草創期の室町初期から中期、高度な知識と技術によって生み出された中国の文物は唐物と呼ばれ、熱心に愛好されました。唐物茶碗もその一つでした。しかし、時代が移るとともに、唐物のみを尊重する気風は弱まり、室町後期から桃山期に入ると、技巧を尽くすことを避けて「冷え枯れた美」を求める侘び茶が大成しました。その中で、唐物茶碗と対極にある素朴なものに美を感じる意識が芽生え、朝鮮半島の日用雑器であった高麗茶碗が注目されるようになり、茶道具として取り入れられたのです。同じ頃、茶人達の個々の志向に応じて、瀬戸や京など国内各地の窯で茶碗を含む茶道具が制作されるようになりました。これが和物茶碗です。

同（見込み部分）

当館が所蔵する彦根藩井伊家伝来の茶碗のうち、唐物茶碗は三点、高麗茶碗は十八点、和物茶碗は四十六点です。井伊家十三代直弼の茶会記をひもとくと、薄茶用の茶碗では和物が多く用いられ、より格式の高い濃茶用の茶碗では、高麗茶碗が最も多く用いられたことが読み取れます。高麗茶碗がより重要視されていたことが推測されるのです。

写真の作品は井伊家伝来の高麗茶碗の一つです。李朝時代、十六世紀に制作されたもので、釉薬が卵の殻のような色合いを呈しているために、玉子手茶碗と呼ばれています。胴にゆったりとした丸みがあり、口縁が外側にそった端反口で、高台には、黒く、硬く焼締まった土の部分を見せています。全体には、白い釉薬が厚く掛かり、ところどころに青みがかった部分が見えます。これは、焼成の中で偶発的に模様が生じる窯変と呼ばれる作用によるもので、その斑の色の風合いがこの茶碗の見どころとなっています。見込みの底には、目跡と呼ばれる三ヶ所の釉はげがあります。これは、多くの器を一度に焼くために重ね焼きしたことによって生じたものです。日用雑器だからこそ生じた制作痕であり、素朴な造形を重んじる茶人にとっては、これも魅力の一つです。

高麗茶碗が持つ、素材を生かした自然な質感や、作り手の息づかいが今にも伝わってくるような素朴な造形。それは、極度に工業化された画一的な製品に囲まれた現代の私たちから見ても、新鮮な美しさが感じられるものと言えるのではないでしょうか。【彦根城博物館　奥田晶子】

写真の作品は、常設展「ほんものとの出会い」で3月15日(日)まで展示します(2月17日(火)・18日(水)は休室、3月9日(月)は休館)。